博物館学雑誌 第31巻 第1号（通巻43号）49～52ページ 2005年11月

【書評】

展示と来館者との相互の働きかけ
並木美砂子・著『動物園における親子コミュニケーション』（風間書房）

布谷 知夫
Tomoo NUNOTANI

最近の博物館の世界で最も話題となっていることは、展示の意味とそれを見る利用者の存在、そして利用者にとっての展示室での学習と評価というようなところであろう。もちろん博物館の資料や研究などの分野でも様々な議論が行われているが、展示と来館者をめぐる問題は、これまで話題になることはあっても、あまり深められたことはなかったように思う。特に博物館の現場で仕事をする学芸員にとっては、自分たちの行う仕事の意味にかかわることとして、気にはなりながらも、はっきりとした答えの見出せないでいた点であった。

並木美砂子氏の「動物園における親子コミュニケーション」は、そういう展示のあり方やその展示を見る利用者がどう展示を見ているのか、ということについて明確な視点を示しており、動物園だけではなく、博物館一般の展示についてもどう考えればいいのかということを示唆するところが多い。

展示室での学習などの話題に、これまであまり明確に議論が行われなかった理由は、おそらく現場での理論不足であったと思う。現場でお客さんの姿を見て、展示の意味や来館者への学習効果というようなことを考えない学芸員はいなかったであろう。しかし経験的にどれだけ多くの情報を持っていても、それを整理し、理論化する学芸員はごく少ない。特にそのような理論化には、多くの学芸員が持っている研究者としての分野とは異なる教育学や心理学の知識がなくては進められない。そのために、何かいえそうな気がしていても、それをまとめて情報発信することができる学芸員はごく少なかったのだろうと思う。評者自身も、これまで展示の意味や来館者と展示との相互の働きかけについて議論をしてきたことがあるが、裏づけの理論がなく、そうだろうと思う、という域を超えることができなかった。おそらく大学の研究者の場合には、現場の情報が得られないために、やはり苦手な研究分野であっただろう。

並木氏は千葉市動物公園での職に従事しながらお茶ノ水女子大学の大学院で学び、平成 13 年度に『展示観覧体験の理解－動物園来園者のコミュニケーション分析を中心に』の論文で学位を授与されており、本書はその論文の一部を出版されたものである。教育学や保育学、心理

学、そして博物館学などの幅広い議論を背景にしながら、動物園での展示と利用者についての議論を進めておられるために議論自体に発展性があり、また並木氏自身が博物館の展示全体に話を関連させていくための筋道をつけながら議論をしておられるために、単に動物園だけの話ではなく、展示の場での利用者一般につなげていくことができる。展示の場での学びという議論しづらい課題に取り組み、理論に裏付けられた現場からの提言となった点が最も高く評価される点である。

本書は序章から第7章までの8章で構成されており、序章では著者の問題意識や来園者調査についての基本的な考え方について、そして第1章から第4章までは、著者自身の調査を行う前提としての来館者調査や学びについての先行研究について述べ、第5章で調査方法の例や具体的な方法の検討を行い、第6章で著者の来園者調査の結果と個別の考察、そして最後の第7章で総合的な考察と来園者の学びを捉える視点の提起、そして展示者側としての提案が述べられている。文献を除いた本文全体が230ページほどであるが第6章と7章とで130ページほどが使われている。章立てとタイトルは以下のとおりである。

序章
第1章　博物館来館者研究からの示唆:「情報の受けて」から「探索者としての来館者」へ
第2章　来館者相互の交流に着目した「交わりのコミュニケーションモデル」の創出
第3章　動物園における展示の発展過程と日本の新しい類人猿展示
第4章　家族間での学習体験
第5章　家族連れ来園者の動物展示観覧の体験を理解するための方法
第6章　親子はどのようにチンパンジー展示を利用しているか(新旧展示の縦断的比較)
第7章　来園者の能動性に依拠した動物展示法と解説のあり方への提言

各章共に、単に先行研究の紹介ではなく、研究史や現状などと著者自身の独創的な意見がちりばめられており、博物館展示について話題になることの多い内容についての現在の到達点について知ることができ、非常に興味深く読むことができる。

序章では、先ず動物園の側の展示意図と来園者の楽しみたいという意識の間にあるズレに対して、そのズレを見出すことが生まれつつある学びを見出すことであるという。そして「楽しさと学びとの関係は、より対等な人間関係の下での、人間や教育に対する深い洞察を必要とする」としながら、「楽しさ」は「誰かと一緒に、同じ時間に、同じものを見たり聞いたりすることが深くかかわっている」とする。これは動物園が提供することのできる「楽しさ」のひとつであろう。そして人はこの楽しさを　通して学ぶことができる。

そしてこの楽しさと学びの関係について議論した後、展示する側の意図と、展示を見る側の

解釈との間にある二重性とその構造を理解することで、その両者のコミュニケーションのあり方を問題とし、来園者同士の発話を材料としてそのコミュニケーションを分析しようとするという問題提起を展開している。

第1章では近年になって行われるようになって来た博物館の来館者研究を取り上げて、その研究の中から、来館者を単に「情報の受けて」と見るのではなく、「自分にとっての意味を主体的に創出する人」としてとらえること、そしてその意味創出のプロセスには共同性があることを述べている。そしてその共同性を展示を見る親密な者同士の「交わり」の展開の中に見出して、その中に「学び」の諸相を見出そうとする。そして第2章ではその交わりのコミュニケーションモデルの提案を行っている。このモデルは「来館者理解」「博物館体験の意味理解」「その二つの交わりが展示空間において展開すると見る点」の三つによって構成されている。そして第3章では、動物園での展示方法の発展について触れ、動物の福祉、本来の行動ができる場と装置の実現、生育環境の再現というような点からの飼育環境の変化があり、合わせて看板などの工夫も行なわれてきたことが示されている。

第4章では、家族に幼児が含まれた場合での家族の行動や言動を通した研究の方法について、アメリカや日本での研究の経過などを紹介しながら、自らの学習の認識として、ロバーツの「来館者は、学んだことは自分の経験したことであり、これまで知っていることに付け加えられることだと報告している」「学びつつあることは、その人の語りの中に現れる」という引用をしながら、著者は、「学習とは日常生活への影響まで含めるという観点が必要だということ」「そこでおきている知的なできごとが展示の諸要素にどう関係して発言するのか、あるいは展示の諸要素がその家族の知的な活動にとって、どのように役割を果たしているかを考察する作業を学習体験の理解とする」としてこれを来館者相互の発話によって考えていくという研究の方向を明らかにしている。この部分が著者の基本的な研究方向を端的に示す部分である。

第5章ではインタビュー法と会話採集法という研究方法について示し、著者の発話分類である、事実確認、疑問、印象、呼びかけ、あいづち、うながし、について、その意味合いについて説明をして、第6章において、具体的な調査の内容と結果の分析が行われ、第7章においては、まとめと動物園の展示についての提言がされている。発話採集法については、先行研究を紹介しつつも、個人の意見に加えて、来館者相互(親子)のコミュニケーションを考える要素を加えて、非常に分かりやすく説明がされている。これまでの同様の調査や研究の中ではあまり示されていない点であると感じる。

また分析の過程でも、展示を見ることについて「見渡す」「見入る」という方法から、「創造する」というモードがあることを指摘し、「見えないことへの創造」に移行していくことを、「事実を手がかりに自分の内側に世界を作ること」および「事実をそこに展開させている背景を思うこと」であるとする。この指摘は展示というものに対する利用者の向き合い方についての興味深

い、本質的な点であり、博物館の展示一般に対しても応用して考察することが必要な課題である。

ただしこの調査では来館者に直接に調査をすることを依頼・許可を得てされているが、発話採集の調査方法については、これまでの様々な否定的な議論がされているため、本書の目的とは異なるが、今後同様な調査研究を行う人たちのためには、その調査法の是非についても、もう少し触れておいていただきたいと思った。

全体が、動物園(博物館)での学びと体験を、利用者が主体であって、利用者同士の交流の中に、体験の豊かさを生み出す力がある、結果として楽しさが生み出されるという一貫した視点で分析を行い、議論が非常に明確であると感じられる。

「楽しさと学び」との関係を明確に示したことはこの著者の先駆的な点であろう。しかしあえて言うと、博物館一般であれば、もうひとつの「楽しさと学び」が問題となる。それは展示への「個人的なかかわり」と「展示の自分化、あるいは展示との対話」といわれる内容である。著者の関心が、動物園と「親子の対話」であるためにこのあたりについては触れられていないが、展示論としては関連して今後議論したいところである。

読みながら、なるほどと思った点やそういうことだったのか、と思う点などに線を引きはじめると、どんどんその線が増えてしまい、線の意味がなくなるようなページがいくつもあった。著者の調査とその結果にいたるまでに、基本的な考えかたや研究史が語られているが、そういう中にも、これまで疑問に思っていたことや、議論をしたことがありながらもうひとつはっきりした結論が出なかったような展示や利用者に関する話題が盛り込まれており、展示というものについて考える上でも非常に参考になることが多い。今後の展示のあり方や展示室での学習について議論を行う時に、まず本書を共通認識の基準にすることで、今後の議論を発展させていけるのではないかと思う。